

学位請求論文審査報告書

氏名 藤井了興（博士後期課程 3 年）
論文題目 「清沢満之の求道—『大経』の仏道として—」
審査委員 主査 大谷大学教授 一楽 真
 博士（文学）[大谷大学]
 副査 大谷大学教授 村山 保史
 博士（哲学）[関西学院大学]
 副査 大谷大学准教授 西本 祐攝
 博士（文学）[大谷大学]
 副査 京都大学名誉教授 藤田 正勝
 博士（文学）[京都大学]

I. 論文内容の要旨

本論は題名に明らかなとおり、清沢満之の求道について確かめることを目的としている。清沢満之は晩年に「精神主義」運動を展開したが、それは親鸞における「本願力回向の信心」を自身に自覚した信念の表明であった。この視点から、論者は清沢の思想の根幹部分を『大経』の仏道として明らかにしようとしている。

論者はまず清沢満之の「主観的確信」を『臘扇記』を中心として見るべきことを提起し、その確信が言語化したものとして『有限無限録』に着目している。『有限無限録』については、これまで本格的に言及されることがあまりなく、論者の着眼は独創的であり、大事な課題を浮き彫りにしていると言える。そして、『有限無限録』から「精神主義」への過程を見ていく中で、言語化された確信が体系的に組織され、客観化されていると見定めている。この見定めのもと、「精神主義」思想は、『有限無限録』の思索内容を限定的に発表していることを確かめている。

「精神主義」に対しては早くから曾我量深からの批判があるが、清沢はそれに応答して、「落在者の自己ベースの修養論」ではなく「修養の届かない深い自己の問題に焦点を置く」論稿を発表していくと論者は述べる。それが「宗教的道德と普通道德との交渉」であると見た上で、論者は満之の立脚地が『大経』の仏道にあると論述している。

全体の構成は以下の通りである。

序

第一章 翻りと「本願」への目覚め

第一節 満之の求道と翻り

- (1) 求道と本願
- (2) 学について

第二節 満之の信念の深化

- (1) 『臘扇記』前後の背景とその意義
- (2) 如意なるものと不如意なるもの
- (3) 自己
- (4) 絶対無限との交渉
- (5) 自力

第三節 『臘扇記』における「修養」

- (1) 「修養」の根拠
- (2) 「修養」の内実
- (3) 根源的「欲望」主体としての自己

第四節 『有限無限録』の意義 — 『臘扇記』からの展開をふまえて—

- (1) 『有限無限録』の背景
- (2) 『有限無限録』の見方
- (3) 『有限無限録』の「道徳」
- (4) 『有限無限録』における如意・不如意

第二章 『有限無限録』の意義

第一節 「道心」と「人心」

- (1) 絶対無限的智力
- (2) 「智」の実践とその対象
- (3) 善悪実践における「知」の課題
- (4) 「私」をして絶対無限を求めしむ
- (5) 「宗学」への願い
- (6) 「真の仏弟子」と「悲歎述懐」
- (7) 善悪論と有限無限論

第二節 「公」の実践

- (1) 「公」とは何か
- (2) 道徳と宗教
- (3) 絶対無限の推求
- (4) 「真の仏弟子」の信念
- (5) 『有限無限録』の重要性

第三章 『大経』の仏道 — 「精神主義」思想への純化—

第一節 『有限無限録』と「精神主義」思想

- (1) 「精神主義」思想の特徴
- (2) 「精神主義」思想の継承点
- (3) 「精神主義」思想の相違点
- (4) 「精神主義」思想の善悪

第二節 「宗教的道德（俗諦）と普通道德との交渉」と自己の固有性

- (1) 「精神主義」への批判と応答
- (2) 「宗教的道德（俗諦）と普通道德との交渉」の背景
- (3) 『大経』三毒五悪段
- (4) 「宗教的道德（俗諦）と普通道德との交渉」の内容
- (5) 「善悪段」としての『大経』三毒段
- (6) 宗教的善悪論

第三節 満之から見る『教行信証』と『大経』

- (1) 「真諦」の分際
- (2) 「三心一心問答」としての「我信念」
- (3) 主観的表現の意図
- (4) 「真諦」としての「我信念」
- (5) 『大経』への純化
- (6) 満之の求道と『教行信証』

結

全体は三章立てで、第一章は「翻りと「本願」への目覚め」と題して、清沢満之の「主観的確信」について『臘扇記』を中心に述べている。第二章は『有限無限録』の意義」と題して、『臘扇記』の直後に著された『有限無限録』に着目し、『臘扇記』からの展開について尋ねている。第三章は『大経』の仏道―「精神主義」思想への純化―と題して、明治34年から発表された「精神主義」思想について考察を加え、それが『大経』の仏道であることを述べている。以下、簡単にそれぞれの内容について触れておく。

第一章では、親鸞で言えば「雑行を棄てて」という決定的な翻りが、満之の場合は明治31年の『臘扇記』に見るべきであると述べる。その際、「回想の文」にある「明治27、8年の養病」の頃に著された『在床懺悔録』では未だ不十分であったものが、明治31年の『臘扇記』に至って自覚的な本願表現をし出した、と述べる。

『臘扇記』の中で、満之における一大転換として論者が注目するのは、明治31年10月24日「自己とは何ぞや。これ人世の根本的問題なり」の記述である。この背景として注意しているのが10月12日の記述で、「如意・不如意」というエピクテタス語録を自ら訳し、記された「私想」である。そして24日の「避悪就善の意志」に展開していく、と言う。これを論者は絶対無限に乗托する落在者としての自己と、絶対無限の意志に従い善悪実践を意欲する自己の二つにまとめている。ただ、『臘扇記』における実践は「対自的实践」であり、まだ「対他的実践」ではないと言う。それが『有限無限録』において引き継がれているというのが論者の見当づけである。

第二章では、『臘扇記』の思索が特に後半の第76項「道德と宗教」に継承されることを確認し、それが『教行信証』「信巻」の「真の仏弟子」と「悲歎述懐」に基づいていることを

指摘している。

論者は、『臘扇記』を継承した『有限無限録』こそが満之の思想の中心であると考えたいと言う。そして先行研究の区分を参考にしながら、新たに四つの区分で構成を示している。そして、この後の『精神界』に発表される「精神主義」思想は本録の純化であると位置づけている。

第三章では、「精神主義」思想は現代でも満之の中心思想と見なされるが、論者は満之の求道の歷程が思想的に整理されたものであり、『有限無限録』に比すれば限定的に発表されていると見ている。

この視点から「精神主義」の論稿を一様に考えるのではなく、批判（特に曾我量深の）をくぐって書かれた最後の二稿（「宗教的道德（俗諦）と普通道德との交渉」と「我信念」）を、それ以前のものとは分けて見るべきと指摘し、最後の二稿に清沢の真面目を見ようとしている。

そして、『大経』の三毒五悪段を満之が「善悪段」と呼ぶべきと述べることに着目し、「宗教的道德（俗諦）と普通道德との交渉」が『大経』における釈尊の教説（勸励）の意図を受けて書かれているものであるとしている。「我信念」もその流れに置いて、「信巻」の「三心一心問答」および「真諦」との重なりについて論述している。

結論としては、求道という視点から清沢満之の思想を見通したとき、中心は『臘扇記』と『有限無限録』にあり、その全体は親鸞の「真の仏弟子」と「悲歎述懐」に導かれてのものだと押さえている。また親鸞の『教行信証』に立脚して、『大経』に順じていくものであったと述べている。

II. 論文審査結果の要旨

論者は清沢満之自身の論稿について全般にわたり丁寧に読解することにより、清沢満之の課題を明らかにしようとしている。特に、これまで清沢の思想が「精神主義」を中心に語られることが多かったのに対し、『臘扇記』と『有限無限録』に重点を置くもので、独自の見解に基づいて重要な課題に取り組んだ論文と言える。中でも『有限無限録』については、これまで深く立ち入って考察を加えたものはなく、「精神主義」の骨子あるいは前段階とみなされてきた。論者は『有限無限録』を中心と見ることで、清沢の思想を明らかにしようとすると共に、「精神主義」思想についても新たな意義を見出そうとしている。

この研究方法は、清沢の早い時期の論稿も含め、それぞれが有する課題を改めて考察していく必要があることを示したと言える。『在床懺悔録』、『他力門哲学骸骨試稿』、『転迷開悟録』などについても、それが書かれた状況も含め、新たな視点で読み込む可能性を提起している。

また、清沢の文章では少し顔を覗かせているだけの親鸞の思想を、論者はかえって清沢の思想の底流にあるものと見定め、『大経』にまで遡って確かめようとしている。たとえば、『教行信証』「信巻」に展開する「三心一心問答」、「横超断四流釈」、「真の仏弟子釈」が、

清沢においては「我信念」、「宗教的道德（俗諦）と普通道德との交渉」、『有限無限録』の根底になっていることを述べている。これは大事な考察と言える。ただ、言葉として表に顕れていないだけに、さらなる考察と検証が必要になる。これも今後の課題として論者によって提示されたと言える。

大谷大学の大学院に入学して以来、五年間かけて学んできた成果をよくまとめて形にした論文である。口述試問においては課題となる点、また不明瞭な点などについて確かめた。すべてについて触れることはできないので、以下に主なものを記しておきたい。

1、論者の独特の文章や言葉使いがあり、読み手にしっかりと伝わるようにする必要がある。また論者にとっては自明なことでも、丁寧に論述することが求められる。読み手にとっては、先に答えが出てしまっているようにも見える。

2、『有限無限録』に清沢の思想の中心を見ようとするあまり、「精神主義」思想を軽んじているように見える。やはり絶筆の「我信念」が大事であろう。論者もその重要性を認識しているのであるなら、論述はおのずと変わってくるにちがいない。

3、『大経』に順ずるという点に清沢の求道を見ようとしているが、「仏説」をどのように考えるか。仏説だから正しいということに、すぐにはならないはずである。これは清沢が何故に「絶対無限」という言葉で、何を表現しようとしたかという課題でもある。

4、清沢の著作を、真宗を明らかにする真宗学の論文として読み込んでいるのは大切で、しかも体系的・具体的に論じられている点が評価できる。ただ、「精神主義」思想のすべてが『有限無限録』に根をもつと言い切れるか。また「三毒」という問題をすぐに『大経』に由来すると結論づけて良いか。

5、清沢における宗教的信念の確立という場合、親鸞にとっての法然のような存在をどのように考えるか。宗門改革運動における関わりや浩浩洞における交わりも視野に入れて考える必要があるのではないか。

以上のように、本論文はさらに検証すべき点がある。しかしながら、文献を丁寧に読み込み、清沢の思想を確かめるという意味において大へん優れた論文である。そのことは口述試問における質疑応答を通して十分に確認することができた。

審査に必要とされる最終試験については、審査員全員により 2021 年 1 月 12 日に試問を行った。その結果、審査員一同一致して、藤井了興に大谷大学博士（文学）の学位を授与することが適当と判断した。